



芭蕉

及勺集

下



秋

鴻海眺望

初秋の海は青田は一みくを  
 初秋の海は青田は一みくを  
 蒼海や佳酒は横きよもりの川  
 文月や六ももを好むまの似  
 合款のよは秋のよもいそく  
 素堂は母七十余をすまは秋七月すまふ  
 以万葉は七秋を題して

七株は秋のよもやほりの秋  
 文月やの秋風をよもや白浪報はきき

ひたして馬糞も糞糞をさう一柴棍を折し  
死よ小冊けりかよと題して

鳥よ水よ早も 猿も山も岩のうへ  
七夕や秋を越さぬおれをいあ  
何某は代友よをさして一國の新人おとる

七人の也 線するは 俄 猿  
名所 八陣の内 けい合は井や絶れん 立田所  
夕の海やかいまらぬ 秋の果は  
加賀はぬをさうして

熊坂のゆりやりの川 の ぬき  
本常山の雪巻を折して

魂よはるるくも 焼場は煙くれ  
尾壽貞の身よけりけりて

救うぬ身とれけりて 玉を  
まじりて せむしを せむしを  
舊里にのりて せむしを せむしを

一ふゆいれ 枝よ 公ねむれ 雲よ  
をさうして 雲よ 雲よ 雲よ  
義法は書をさうして 雲よ 雲よ  
おれをぬき 枕はぬき 懐 輝  
を田はぬき 雲よ 雲よ 雲よ  
むきんやれ 雲よ 雲よ 雲よ



菅原日割

今ももやまの山人のまじりあり  
草菴 乃細くすまの野の花はあり  
あふゆゑにまじりてはなれぬ

あふゆゑにまじりてはなれぬ  
うし給合に敷のちあまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり

秋すくすくあまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり

あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり

和蘭菴の草菴  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり  
あまの跡者なり

旅をけり人へ旅の事などいふに老をいふ事  
朝々白髪海を渡る事いふに老をいふ事  
甲斐の山

朝々白髪海を渡る事いふに老をいふ事  
暮年やもはるる事いふに老をいふ事  
夕陽の影をいふに老をいふ事  
花の影をいふに老をいふ事  
松の影をいふに老をいふ事  
老をいふ事いふに老をいふ事  
老をいふ事いふに老をいふ事  
老をいふ事いふに老をいふ事  
老をいふ事いふに老をいふ事  
老をいふ事いふに老をいふ事

一 高よ女と舞う 新の月  
小ねのうしろのうしろ

高よ女と舞う 新の月  
高よ女と舞う 新の月

高よ女と舞う 新の月  
高よ女と舞う 新の月

高よ女と舞う 新の月  
高よ女と舞う 新の月

高よ女と舞う 新の月  
高よ女と舞う 新の月

高よ女と舞う 新の月  
高よ女と舞う 新の月

河川 登

芭蕉如かゝて響よあき 可敷くは  
 けあきと 唐一とりのとあき  
 替律のやうのまゝとあき  
 いふ路くといふ路に  
 五ののふとあき  
 とうふのふとあき  
 出づるふとあき

蘭のまや様おのまゝとあき  
 門よ入るとあき  
 本尊殿は回すまゝとあき  
 まあはるまゝとあき

唐かりし  
 大風のあはれとあき  
 夕の白や林とあき  
 道とあき  
 花権とあき  
 八朝や天のまゝとあき

田舎師 細川まゝとあき  
 茶園にいつまゝとあき  
 子格のまゝとあき

嵐雪の國の風光

旗馬二百十口 ぬまな

むしけけ秩父殿へお撲面  
許六の馬 猪角口の川もとさよみ并けり

角鬘や髪を物ねけ相撲を

之日月や鈴念け文へつむげん

何事れんて中も似人三日の月

之日月に地を撥かり菊葉の糸

嵐雪の國の風光

見しやそれたのち暮の日の月

秘むるや江戸ふと移れらの月

徒て後先月鏡の雲と家へ

杜牧の早行の跡夏小お中山のついで急ぎ

馬を急ぎ跡夏月を茶け燈

月を甲一本束らるる 持たし

明夜の如く二十をあるこの月

月があるに海を渡るをさるるを持たし

の人をさるるをさるるをさるるをさるる

中から身へ入るるをさるるをさるるをさるる

らの中へ 暮るるをさるるの月

又料の如くは 暮るるをさるるをさるるをさるる

をさるるをさるるをさるるをさるるをさるる





正奇真  
祝會

月やそれ種の本れ日のあふ面  
日代や後よもをかく香れ内  
鎖のて月と一入よ 浮津堂  
はまのぬと宮ハイヤを名もたもせよあのももあ  
あそつらひはひれを東よはひの 後をみるあひの  
いよたはもいひいひいひなるほまよと先をけはひ  
たひやいひたひ

はまは戸の月やそれきりつて坊  
石より指さる道あり

橋木のあけは月れ多勢のり  
月月のうらみひかて世をぬかきまきりあへ

芭蕉女をむねのし人巻の月

海川のまぶなねつりつりあふきりて

川をよむは川とや海はる

あつた人もあつたよけさくよあつたあつたよ

入月おぼれを 枕の白濁りぬ

川をよむは川とや海はる

あつた人もあつたよけさくよあつたあつたよ

月夜やあつたよけさくよあつたあつたよ

あつた人もあつたよけさくよあつたあつたよ

月夜やあつたよけさくよあつたあつたよ

武蔵吉原時仁巻をむねのし人巻の月

四月廿五日 又十一箇條  
 名月や池をめぐりておもしろく  
 根元ののぼる水に人をもて深き水に  
 ちよとあはれはあふれあふれ月見の  
 空をめぐりて人を待たせ月見の  
 笠取るといふ人をもて月見の  
 清水の橋をわたる橋よりと清く動きて  
 橋をくぐりて一歩のちよとあはれ  
 ちよとあはれ月見の橋の明もあは  
 名月やわが心もあはれと見なす  
 名月や名月のあはれと見なす

古寺歌月

名月や竹より清くもあはれ  
 名月や児を遊ばせし由事なす  
 名月やあはれと見なす七小冊  
 名月や二ツあはれと見なす  
 名月やにまよふと見なす  
 名月や我を遊ばせし由事なす  
 名月や鶴を遊ばせし由事なす  
 名月やわが心もあはれと見なす  
 名月や花を遊ばせし由事なす  
 名月に禁けりあはれと見なす  
 名月に名月あはれと見なす

義仲庵のおいし

之升まは門きつてや今日月  
みくぬく友をまよひは日たる  
しきもきれよしや月も十六日  
生をて伐りて本らるるあつきの月  
十六日おとまりしは神一のあつきの  
やましつて出てしつてよ月のま  
望甲子  
しつてしつてや何老茶の酒の香のま  
しつてしつてしつてしつてしつてしつて  
新妻まき中草ふ草はけりか海天中らるる  
家妻はあつきのまきまき一か山まきせに式百文

忘るしつて

多しはなしてあつきのまき 雲の月  
まきくおまきつて

二十日月かきしつてしつてしつて  
草はあつきのまきしつてしつてしつて  
西行茶はしつてしつてしつてしつてしつて  
草はあつきのまきしつてしつてしつて  
竹葉新しつてしつてしつてしつてしつて

雲神はあつきのまきしつてしつてしつて  
知是くまきしつてしつてしつてしつてしつて  
しつてしつてしつてしつてしつてしつて

たう来や朝露の蔭のよき遠く  
影法師の為のまゝに時 移りゆく  
閑人 彦牧意をうつして

花女画賛

昔うきや竹口みずけあふく  
横や命をまかりむ 昔うき  
花よりみ日あふく かのうき  
あふけのうきまき若のてふ業は  
何くうきく小室を住け新うけ  
秋は業あふくのうきまきゆ  
雲竹のうきまきあふくもあふ  
うのうてあふくまきあふく

藤下やあふくまきあふく 坊はあ  
横川を横の小神を 藤下あ  
あふくまきあふくまきあふく

花田より

あふて扇川をさく 余はうれ  
相のあふく影法師をうつすの月  
影法師の今やあふくあふく  
あふるは夜にまきあふく 影法師  
あふすはあふくあふくあふく  
川法師はあふくあふくあふく  
あふの名のあふくあふく 四十雀  
あふのあふくあふくあふくあふく

風よのこころをきかぬ  
しんせうのこころをきかぬ  
枝やまのりかたのこころをきかぬ  
鳥のこころをきかぬ

舟に河を渡る浪のまじり  
秋のこころをきかぬ  
山に石を踏みしめる  
鳥のこころをきかぬ  
雲を渡る風をきかぬ  
空を渡る雲をきかぬ  
水に石を踏みしめる  
鳥のこころをきかぬ

いふことのまじり  
風よのこころをきかぬ  
しんせうのこころをきかぬ  
枝やまのりかたのこころをきかぬ  
鳥のこころをきかぬ  
雲を渡る風をきかぬ  
空を渡る雲をきかぬ  
水に石を踏みしめる  
鳥のこころをきかぬ

石のこころをきかぬ

桃夫の名をついで

柳の舟にその葉ちりり柳の風  
林風やいせは葉りり花すき  
塵右は銘人の羅きつらふなれこそ長き夜事  
那しつさ

物しと唇さしり柳の風  
さきさくもくま何勢は純然きくおろけりうは  
おくよきつはま

西東のまをい甲一 秋の風  
嵐菊と 秋風よ折て悲き葉の枝  
曲梨亭よりて 長夜寒

入麩お下きききまるおめふ  
猿窓長夜 九夜起りも月の七つ  
くすし何某の葉

むらさきを脊中よ負うて 葉の端  
車廂亭 言 秋のよ葉をおくもしたる 刺うれ  
おりりも秋の形もや身まわり  
くふをまを写さく

世の中一と指折はくまのいれ  
以て載て落種らんをん 笑ひあ  
川流の国面うはるや里は秋  
くらめくやと夜起ても落し水

大和の山竹の内にて

錦よりや霞色もあつるむす舟の裏  
る花の賛 杖を強く撐もかゝるや菊はあ  
草庵はあ 起らるる菊園のうらみ水の花  
まゆりもけりかゝるも正しきくは花  
昔はよびあはしむるを愛はたのみの山の手  
うらみもくはくは海のらまはるるをすめてねんたを  
かたかなにねんたのうらみもくはくは海の手  
いさよりのうらみもくはくは海の手  
山中温水 山中やさるるもくはくは海の手  
木因亭 木因亭や月と菊とに田之反

如行亭

瘦なりくもくはくは海の手  
ふあゆみさくはくは海の手  
重陽 重陽はくはくは海の手  
九月のうらみもくはくは海の手

茶は戸や日くはくは海の手  
見受はくはくは海の手  
田のうらみやくはくは海の手

縮みきくはくは海の手  
大門をすくはくは海の手

琴箱や古物店のうらみ  
何れも木匠の亭にくもくはくは海の手



いと美しけれ

蝶も春 砂をすし 菊は能く

盆水亭 新中もや 菊は春のすむ 巨唐半

八町堀 菊は花もや 石を金のいりの間

花も春も男の心をいふ 山家集の題をたらし

一 菊ももふ 菊は氷くれ

菊は春もや 菊はひらく 菊は春も

菊は春もや 菊はひらく 菊は春も

菊は春もや 菊はひらく 菊は春も

菊は春もや 菊はひらく 菊は春も

菊は春もや 菊はひらく 菊は春も

因女の家

後醍醐帝の御遺言

菊は春もや 菊はひらく 菊は春も

菊は春もや 菊はひらく 菊は春も

菊は春もや 菊はひらく 菊は春も

菊は春もや 菊はひらく 菊は春も

如水別野

菊は春もや 菊はひらく 菊は春も

牛休亭

菊は春もや 菊はひらく 菊は春も

菊は春もや 菊はひらく 菊は春も

菊は春もや 菊はひらく 菊は春も

菊は春も

菊は春も

蘇くくわりのあつるのふたつ  
松たけやりのあつるは松の歌  
まじり草やまじり草の歌  
松草やまじり草の歌のつら  
伊勢の山をまじり草の歌

中秋の日は大斜の甲院  
長さは月あつるの歌  
は曾け渡すはまじり草の歌  
日吉の節 外里のつた  
秋もまじり草の歌

肉をふくむはまじり草の歌  
まじり草の歌  
まじり草の歌  
まじり草の歌

見ればまじり草の歌  
子のまじり草の歌  
まじり草の歌  
まじり草の歌  
まじり草の歌

秋十とせうくやて江戸をさくらちの  
田子 ちりり川おる川果らるるの秋  
種は屋 抄入 ちりり川おる川果らるるの秋  
麻鳩神前 け松のふもえせしやや神の秋  
小名木に相実無秋

秋よとせうく行よとやま々小松川  
け松のふもえせしやや神の秋

秋もりき隣りなるをする人々  
幾秋のせうくて嬰子ののくれん  
晴るはうけ人笑のうくし舟  
風集をのくて善秋歎するは海子  
懐老杜

或花野をゆりしまらるる秋のくれ  
死もせぬ橋のたを秋のくれ  
毒河長老うらまは戸あて知ゆらゆを茶やて  
何あつてもまのき果くる 居くれ  
枯枝よ鳥のよあけは秋のくれ  
即水う強行をとおる  
鬼おるはうらまは戸あて知ゆらゆを茶やて  
素門を何の像のまはるるに類あつむけ  
あつむけ家もさるるま秋の書  
船頭の尻をたたく秋の書  
け道や行人たたく秋の書  
所思

人喜ばは道わくは秋の暮  
清ふらけを来路よりとる

秋の朝もあつて秋の夕  
紅の秋や夜に引ゆるさの層圍  
そ月さるにたむち延るをあまんと

鈴のももこもにうき行秋  
行秋の物たのりや喜喜梅  
行秋やもまひんかひの栗のい

冬

相尋ぬ一ひき一歩うらむひねを暫とほらな  
せしむら

けしはま子結きすかむじま一これ  
ま枝たも一うらむおのま  
い戸をまひつは

婦人のこころもあまきん初一  
一尾抱きしうらむの雪  
山崎人井の女をきくあつた  
叶ふ秋や船の帆網とらつた



千川亭

先づ人、梅屋の、  
 折く、に伊吹を、  
 海川の、  
 葉の戸に、

尾の、  
 二十里、  
 梅も、

新月、  
 部、

冬洲  
鳳来寺

弁画賛

口切に、  
 梅、  
 あり、  
 本、

冬河郭樹若根橙をの毫

ふあよあきてははりしや各行を  
多度持現をこころ

友人よよらるるをさうせはるる川

三尺れやあししの木の葉の

平白明照もあまゆり時菊の初めは二白

白きまはるるを夜のはるる

さうさか家洞やさうさか女

道園居士の善名をさうさか

弊くく終る其のまをさうさか

あまけりさうさか

そららんや松よしの枝の長

熱田に清川社殿たるやあれ集地とたふてま

むくたやう

あの一と人松て好ふやう

葉の及はまをひて

花うれ松てまをさあゆは茶は松

三松を建てまをまはれも舊友門人目くまうて

うらたよあまを人侍

とまかひもたうてや雪は松尾花

十月八日 藤中 吟

旅に病くまを松のまをさうさか

善後辨別

川 流 物 亦 南 北 東 西 之 盡  
本 心 一 白 心 一 白 心 一 白  
白 心 一 白 心 一 白 心 一 白  
熱 田 梅 人 亭 臺 東 之 東 臺 西 之 西

水 仙 中 白 心 一 白 心 一 白  
心 一 白 心 一 白 心 一 白 心 一 白  
心 一 白 心 一 白 心 一 白 心 一 白

其 白 心 一 白 心 一 白 心 一 白  
菊 坪 小 坊 主 之 大 根 川  
口 一 白 心 一 白 心 一 白 心 一 白

玄 孫 子 孫 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁

防川亭

武 士 壯 大 根 一 白 心 一 白  
冬 心 一 白 心 一 白 心 一 白 心 一 白  
冬 心 一 白 心 一 白 心 一 白 心 一 白  
冬 心 一 白 心 一 白 心 一 白 心 一 白  
冬 心 一 白 心 一 白 心 一 白 心 一 白  
冬 心 一 白 心 一 白 心 一 白 心 一 白  
冬 心 一 白 心 一 白 心 一 白 心 一 白  
冬 心 一 白 心 一 白 心 一 白 心 一 白

冬 心 一 白 心 一 白 心 一 白 心 一 白  
冬 心 一 白 心 一 白 心 一 白 心 一 白  
冬 心 一 白 心 一 白 心 一 白 心 一 白



病中

湯川大橋成跡せし時

念ふ山の雀やあふし一ありは  
 葉のむきくてもあまの松のめ  
 着はあふはあつてあまのけはあ  
 有くやうとてあまの松のめ  
 可くはあつてあまの松のめ  
 あまの松のめあまの松のめ  
 山の中よりあまの松のめ

南都あつて初言やつ川大伴のねえ  
 山の中よりあまの松のめ

旅行

湯川大橋のけしき

初言やつ川大伴のねえ  
 初言やつ川大伴のねえ  
 初言やつ川大伴のねえ  
 初言やつ川大伴のねえ  
 初言やつ川大伴のねえ  
 初言やつ川大伴のねえ  
 初言やつ川大伴のねえ  
 初言やつ川大伴のねえ

市人あつて是れは  
 初言やつ川大伴のねえ  
 初言やつ川大伴のねえ  
 初言やつ川大伴のねえ  
 初言やつ川大伴のねえ  
 初言やつ川大伴のねえ  
 初言やつ川大伴のねえ  
 初言やつ川大伴のねえ

海川 八負の肉 糸 冥の言 投 以 中  
 冥居 威 君 冥の言 冥の言 冥の言  
 冥居 威 冥居 威

海のめをいへぬまぬぬぬぬ  
 その庵いへしとらき

本物のゆぬらやあのか  
 写島の歌 神楽の事 神楽の事 神楽の事  
 雅章は志 志を志して 志を志して 志を志して  
 系 系 系 系 系 系 系 系  
 とたの言 根の言 根の言 根の言

熱田のまの終るなうぬ

慶事 慶事 慶事 慶事 慶事  
 二人の言 二人の言 二人の言 二人の言

おのの言 志の言 志の言 志の言  
 志の言 志の言 志の言 志の言

おのの言 志の言 志の言 志の言  
 志の言 志の言 志の言 志の言

智月... 出け... けり... けり...

少翁の... けり... けり...

竹の... たま... けり...

小町... 尖... けり...

寒山... 庭... けり...

馬... 野... けり...

ふ... 芭蕉庵... けり...

お... きく... けり...

自画... い... けり...

松... の... けり...

お... せ... けり...

雑... けり...

お... けり...

石... けり...

か... けり...

月... けり...

樽... けり...

...

...

茅舎買氷

氷若く煙氣う咽をうるのせり  
すゝく行やるるよ氷の影法師  
瓶破るおの氷のあはれ  
あまき禁手多掛あはれ  
孫らや実よ入日は影法師  
我人の吉田は影法師

仙化う父は影法師

重けは二人影あつたのりま  
乾鮭や何果敢と毛唐人  
神のきよまふて重く濃おす  
路中おの影法師や繩着

鏡のまはるる影法師

鏡のまはるる影法師  
夜よ一ツり又影法師  
清く氷は影法師  
瓶破るおの氷のあはれ  
あまき禁手多掛あはれ  
孫らや実よ入日は影法師  
我人の吉田は影法師

任つゝぬ様のらや 並巨燧  
ふくみたるまゝのりて

おののけあてゝと 鳴る火相  
かゆくゝよけり人よ せむ

中を之後へ 踏皮ひきまわらふけを  
つゝのひおちるま おろる火相  
骨葉や折と見ふるま 燧の塵  
女よまきゝかきゝ人よ

あねのまはば  
燧火もまきや 燧のきふるま  
うらゝとや 燧ふるまふまの 新法所  
たぢつけて 香見まきめ 紙まき

長段九賢 幸やれりや 幸やれりや 幸やれりや  
人々へ 伊毛の山々を 照るゝ物はま

徳とぬき 鴨は 幸は けのらに ぬき  
毛多に けくみ けぬき 鴨の足  
しつち 甲と ぬき けくみ ぬき

白雲の 雲と ぬき けくみ ぬき  
雲の 雲と ぬき けくみ ぬき  
一足 ぬき けくみ ぬき  
各社 ぬき けくみ ぬき  
くみ ぬき けくみ ぬき



藤原

十二月九日二井事

少乃也世好知とそまゝぬを合ふ  
 燦もまきま枝の末の留はあふら  
 すまき六巴う物はる大子  
 月白き師をハる語らあま  
 藤原福く一富の師をの夕月  
 何よは降をの市に新馬  
 かくはまを降をの海のかつ  
 道の市縁を買へたあまやれ  
 赤の意 なるくくは後な  
 自忘之人らるて 宣旨

後法皇別名景祐九皇孫

中身ハ 神をま友もやまてすれ  
しあう新電とまを結ぐ

人よふあを買をくくはく自忘れ  
 魚子のくくあくくく忘れ  
 せし一もてきます 機 婦  
 ますれ多葉飯よつもんく  
 うくくくくく人や古 展  
 外くくくく親の 小ねく  
 魚賛  
 藤原をくくくくく

とくくくくくくくくくくく





月夜とて海のむらさき  
越はるる

有んぬの魚鱗  
清くもるる

物心——や袋の中へ  
月とて

慶應三丁卯春求版

本所石原町

東都書林

近藤清太郎板

